The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『婆沙論』と『大智度論』

三　友　健　容

問題の所在

有部の成立について，『異部宗輪論』などは仏滅後百年頃に起こった根本分裂の後に成立したと説いており，有部教学の根幹をなす六足・發智の成立は仏滅後三百年[1]頃であり，その後に『婆沙論』が成立したとされているが，その詳細はいまもって不明である．この点，大乗側の資料とは言え，『大智度論』に引用される「阿毘曇毘婆沙」や「八犍度阿毘曇六分阿毘曇」「迦旃延尼子弟子輩」などの言葉は，この問題の糸口を提供してくれると考えられる．また鳩摩羅什は自分がアビダルマ論書を書いたならば，迦旃延子を越えたであろうと語っていたというが[2]，『倶舎論』の著者世親を知っていたようにも思えず，羅什とアビダルマとの関係もひとつの切り口になってくる．本研究では，『大智度論』におけるアビダルマの説を吟味することによって『婆沙論』成立などの問題に迫ろうとするものである．

1．『婆沙論』成立に関する従来の見解

漢訳された『婆沙論』には，周知のように三種類ある．Saṅghabhūti（僧伽跋澄）がCE[3].381年に長安に入り漢訳した『鞞婆沙論』14巻本（十四巻『鞞婆沙論』と略称）と，Buddhavarman（浮陀跋摩）がCE.425年に北涼の城において漢訳した『阿毘曇毘婆沙論』100巻（現存60巻）（六十巻『毘婆沙論』と略称）と玄奘がCE.659年の漢訳した『大毘婆沙論』200巻である．これら三訳の対応関係については，すでに先行研究が発表されている[4]ので，それに譲るが，成立の先後関係についても未だ定説を見ていない．

2．『大智度論』における「阿毘曇」説

『大智度論』の成立に関してはNāgārjuna（龍樹）著作説，羅什（CE.350-409）増

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

補説，羅什著作説などあるが[5]，一応，龍樹（CE.150-250）著作説として検討してみると，『大智度論』には「阿毘曇」説として引用，乃至は紹介されている箇所が数多くあるが，そのほとんどが有部関係の教理を指し，わずかに犢子部のアビダルマ[6]と『舎利弗阿毘曇論』の名前[7]をみるだけである．明らかに有部の所説として名前を挙げている箇所もあり[8]，そのほかは教理の特色から有部であろうと推定できるが，それならば，いずれの有部論書から引用しているかとなるとはっきりしない．以下，引用されている代表的な箇所を検討してみることとする．

(1) 説一切有道人輩言．人，一切種，一切時，一切法門中求不可得．譬如兎角龜毛常無．復次十八界，十二入，五衆實有自性，而此中無人[9]．

ここでは，人すなわちプドガラ（pudgala）が実有であるという犢子部の説に対して，有部は一切種，一切時，一切法門，十八界，十二処，五蘊のなかにも兎角亀毛のようにプドガラは不可得であることを述べている．犢子部に対する批判は，すでに『識身足論』に補特伽羅論者として批判しており，『集異門足論』でも名指しこそしないが明らかに犢子部を暗示して有部の正論を述べているから，早い時期から犢子部とは一線を画していたことがわかる．ところで，「兎角龜毛」は『中論』によく見える譬えであるが，『大毘婆沙論』でも同様な表現がある．すなわち

問補特伽羅何縁不知．答彼如兎角不可得故．謂一切法無我有情補特伽羅．命者生者能養育者．作者受者．唯空行聚．是故無有補特伽羅．能知諸法[10]．

として，プドガラが実有でないことを兎角に喩えて非難している．十四巻『鞞婆沙論』や六十巻『毘婆沙論』にも同様な喩えがある[11]が，そこでは身と命との異不異を問題に対する釈尊の答えとして出るだけであってプドガラを問題としているのではないから，『大智度論』のこの説は『大毘婆沙論』の箇所に一致する．

(2) 問曰八犍度阿毘曇，六分阿毘曇等，從何處出．答曰佛在世時，法無違錯．佛滅度後，初集法時，亦如佛在．後百年，阿輸迦王作般闍于瑟大會，諸大法師論議異故，有別部名字．從是以來，展轉至姓迦旃延婆羅門道人，智慧利根，盡讀三藏內外經書，欲解佛語故，作發智經八犍度，初品是世間第一法．後諸弟子等，為後人不能盡解八犍度故，作鞞婆娑．有人言．六分阿毘曇中，第三分八品之名分別世處分（此是《樓炭經》作六分中第三分），是目犍連作；六分中，初分八品，四品是婆須蜜菩薩作，四品是罽賓阿羅漢作；餘五分諸論議師所作．有人言．佛在時，舎利弗解佛語故作阿毘曇；後犢子道人等讀誦，乃至今名為舎利弗阿毘曇．…幾有色，幾無色．幾可見，幾不可見．幾有對，幾無對．幾有漏，幾無漏．幾有為，幾無為．幾有報，幾無報．幾有善，幾不善．幾有記，幾無記．如是等是

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

名阿毘曇．…幾無色界縁．幾不繫縁．幾無礙道中修，幾解脱道中修．四果：得時，幾得，幾失．如是等分別一切法，亦名阿毘曇[12]．

ここで述べられている「八犍度阿毘曇，六分阿毘曇」とは言うまでもなく，『發智論』と六足論のことであるし，「後諸弟子等，為後人不能盡解八犍度故，作鞞婆娑」というから，『大智度論』が『婆沙論』を知っていたことは明白である．また「六分阿毘曇中，第三分八品之名分別世處分（此是《樓炭經》作六分中第三分），是目犍連作」とあるから，六足論の第三に当たるところの論書は「分別世處分」すなわち『施設論』の「世間施設」ことで『樓炭經』をもとに目犍連によって編纂された第三の「足論」であるという．現存の『樓炭經』は6巻13品あり，『大智度論』でいう「八品」ではないが，その内容は閻浮利品・欝單品・轉輪王品・泥犁品・阿須倫品・龍鳥品・高善士品・四天王品・忉利天品・戰鬪品・三小劫品・災變品・天地成品で，合計十三品の世間論であるから，『大智度論』のころには八品であったものが，その後附加されたものであることがわかる．しかし，漢訳として現存している『施設論』は因施設だけであって，世間施設はチベット語訳だけがあって漢訳では欠落しており，『大智度論』でいう『施設論』には因施設を含んでいないから，『大智度論』のころの『施設論』とは世間施設だけであったということになる[13]．また，六足論の著者について，『大智度論』は『發智論』が迦旃延婆羅門道人の作であり，六足論の第一は八品あり，前半四品は世友，後半四品は罽賓の阿羅漢，その他の五分は諸の論議師の著作であるという．『大智度論』では，六足論の順番が述べられていないから，初分というのはどの著作を意味するのだろうか．インドの伝承を伝えるヤショーミトラは，まず迦旃延子の『發智論』，つぎに世友の『品類足論』，提婆設連（Devaśarman）の『識身足論』，舍利弗（Śāriputra）の『法蘊足論』，目乾連（Maudgalyāyana）の『施設論』、富楼那（Pūrṇa）の『界身足論』，マハーカウシュティラ（Mahākauṣṭhila）の『集異門足論』の順序である．この順番でいくと『大智度論』でいう六足論の第一とは『品類足論』になる．この漢訳の『品類足論』はすべて世友の作であって，『大智度論』の記述とは一致しないが，現存漢訳『品類足論』が八品となっているから，『品類足論』であるとみてよいであろう．その他の五つの足論の著者については『大智度論』は「論議師」というだけであって不明である．また，舍利弗が作成したアビダルマ論書はのちに犢子部たちが伝持しており，それが現存の『舍利弗阿毘曇論』であるという．この『舍利弗阿毘曇論』に関しては先行研究があるので[14]，ここでは触れないが，問題のある記述である．また有色・無色，可見・不可見などの

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

項目を分別することをアビダルマであるという方法は,『品類足論』[15] などに見られる,解説項目のことであり,初期のアビダルマの特色と言える.

(3) 復次,阿毘曇中,迦旃延尼子弟子輩言,何名菩薩.自覺復能覺他,是名菩薩.必當作佛,是名菩薩.菩提名漏盡人智慧,是人從智慧生,智慧人所護,智慧人所養故,是名菩薩.又言發阿鞞跋致心,從是已後名菩薩… [16].

いつから菩薩と呼ばれるようになるのかは,『大毘婆沙論』でも重要な問題として扱われている[17].『大智度論』では迦旃延尼子の弟子輩が,アビダルマのなかで菩薩を定義して①自からも覚り他をも覚らしめる.②必ず佛になる者.③無漏の智慧から生じ,智慧ある人に護られ,養われる.④不退転心を生ずる.⑤三悪道を離れ常に天上か人間に生まれ,貧窮下賤に生まれず尊貴に生まれ,常に男子に生まれ,諸根具足し,常に宿命を記憶し智慧あり常に一切の悪法や悪人を離れて佛法を求めて弟子をとるという五法を得る.⑥三十二相業を行ったもの.以上の六条件が満たされたものが菩薩だという.この説は『大毘婆沙論』の定義と一致する[18].そして『大智度論』では第一阿僧祇劫は釈迦佛に出会ってから刺那尸棄佛に至るまでで,女性として生まれることはなくなるも,未だ作佛することを知らず,第二阿僧祇劫では刺那尸棄佛から燃燈佛までの諸佛を供養し,七枚の蓮華を燃燈佛に供養し,鹿の皮の衣を敷き,ぬかるみに髪を敷いた功徳により燃燈佛から来世に釈迦佛となるであろうとの授記を得て作佛を知るけれども,他に対して言わない.また第三阿僧祇劫では,燃燈佛から毘婆尸佛に至るまでの諸佛に供養し,三十二相の業因の種をうえる.しかも,この業因を行う所は色・無色界ではなく,欲界の五道のうち人道であり,四天下のうちの閻浮提の男性であり,佛身によって業因をうえるため佛の出世のときであるという.六十巻『毘婆沙論』では,菩薩は三阿僧祇劫のなかで生死を繰り返すが,業によって悪趣に生まれるのではなく願力によって悪趣に生まれることを述べていても[19],『大智度論』のような定義はない.また十四巻『鞞婆沙論』では,菩薩に関して述べられることはあるが,三阿僧祇劫の修行について具体的には触れていない.ところが,『大毘婆沙論』[20] では,菩薩を定義して『大智度論』と一致する記述がある.『大智度論』における菩薩の定義に対応させて比較すると,①他が苦しみを受けているのを見て必ず救済し,その功徳をもって菩提に廻向し,有情を利益して報酬を求めない.②『大智度論』に述べられている②の「必ず作佛する」という記述は,この文章のなかにはないが,菩薩は当然作佛するのであるから問題ない.③知見が勝れ弁才があり,性質が柔和で言葉も穏やかである.④決定して退することが

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ない．⑤高貴な家に端厳な男子と生まれ，諸根円満であって，宿命を知り，深く因果を信じている．⑥の三十二相の業因については，この文章中にはないが，『大毘婆沙論』でしばしば語られているところであって問題はなく，『大毘婆沙論』のほとんどの説明が『大智度論』に説かれる阿毘曇の菩薩論と一致する．六十巻『毘婆沙論』は本来百巻あったものが，戦火に焼失したものと言われているから，失われた四十巻に『大毘婆沙論』と同じような記述があったとも考えられるが，十四巻『鞞婆沙論』には一致するところが全くないし，『婆沙論』三訳は四十二章の一致するところが元の形態であり，『大毘婆沙論』のこの菩薩の定義はこの四十二章以外の箇所に当たっているので『大智度論』は何をもって阿毘曇の説としたのか問題が残る．また『大毘婆沙論』では，菩薩の定義に付随して大乗佛教徒が一楊枝を施しても成佛できるというのは増上慢であると批判しているが[21]，このような文章は，それ以前の『婆沙論』二本にはないし，『大智度論』にも出てこないから，『大毘婆沙論』になってから付加されたものと考えられる．

(4) 又聲聞法中說：佛過三阿僧祇劫，常為男子，常生貴處，常不失諸根，常識宿命，常不墮三惡道中；從毘婆尸佛來，九十一劫．如汝法，九十劫中，不應墮惡道，何況末後一劫！以是故知非是實也，方便故說．問曰：佛二罪，毘尼，雜藏中說，是可信受．三阿僧祇後百劫不墮惡道者，從初阿僧祇亦不應墮惡道，若不墮者，何以但說百劫？佛無是說，但是《阿毘曇鞞婆沙》論議師說！答曰：《阿毘曇》是佛說，汝聲聞人隨《阿毘曇》論議，是名《鞞婆沙》，不應有錯！又如薄拘盧，以一訶梨勒果施僧，於九十一劫中不墮惡道，何況菩薩無量世來以身布施，修諸功德，而以小罪因緣墮在地獄！如是事，《鞞婆沙》不應錯！以是故，小乘人不知菩薩方便．復次，聽汝《鞞婆沙》不錯，佛自說菩薩本起：菩薩初生時，行七步，口自說言:「我所以生者，為度眾生故.」言已，默然．乳餔三年，不行，不語；漸次長大，行，語如法．一切嬰孩，小時未能行，語，漸次長大，能具人法；今云何菩薩初生，能行，能語，後便不能？當知是方便力故．若受是方便，一切佛語悉皆得通；若不受者，一實一虛！如是種種因緣，知為度眾生故，現行惡口[22]．

『大智度論』は，菩薩は三阿僧祇劫とその後の百劫の間，悪道に堕さないというが，これは佛説ではなく，阿毘曇鞞婆沙論議師の説であるという．阿毘曇鞞婆沙論議師とは Abhidharma-vaibhāṣika のことであろうから，『大智度論』はまさに有部の毘婆沙師を指して批判し，本来菩薩は第一阿僧祇劫から悪道には堕さないから，百劫を加えて悪道に堕さないという必要はないという．この批判に対して毘婆沙師はアビダルマを佛説であるとし，アビダルマに従って論議をしたものが毘婆沙（論）であり間違いはないのだとして，薄拘盧が一果を僧に施しただけでも九十一劫悪道に堕ちなかったのだから，無量劫のあいだ身をもって布施をした菩薩が小罪によって地獄に堕ちることがあろうかとして，その正統性を述べてい

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る．これに対して，菩薩の生誕と七歩の歩みなどを述べ，小乗は方便ということを知らないが，方便を知らなければ，たとえ佛語であっても，あるものは真実であり，ある教えは虚妄ということになってしまうとする．『大智度論』には「九十一劫の間，悪趣に堕さない」という記述[23]が現れるが，このような内容は『生經』と『撰集百縁經』(*Avadāna-śataka*) などの経典と有部の論書だけにしか見られない[24]．『生經』と『撰集百縁經』(*Avadāna-śataka*) は有部（根本有部も含む）の思想を反映しているから，『大智度論』は有部の考え方を取り入れて批判しているといえる．しかしながら，漢訳『婆沙論』三本のうち，十四巻『鞞婆沙論』には「九十一劫の間，悪趣に堕さない」という思想はなく，六十巻『毘婆沙論』[25]と『大毘婆沙論』だけにしか見られない．また六十巻『毘婆沙論』は願力によって菩薩も三阿僧祇劫に悪趣に生まれることが出来るといい，縁覚も佛種の忍を起こすことが出来るという説をあげているが，有部の承認は得られていない[26]．それゆえ，『大智度論』は少なくとも，六十巻『毘婆沙論』と『大毘婆沙論』の有部思想を批判していることになる．またこれに関連する事柄として，三十二相をいつから具すのかという問題を提起し，迦旃延尼子弟子輩は，三阿僧祇劫に佛の三十二相がなく，佛相の因縁もないならば，どうしてこれを菩薩と知ることが出来ようかと疑問を呈しているが，三阿僧祇劫を過ぎてから三十二相の業因を植えるとする[27]．『大毘婆沙論』では三十二相は，転輪聖王でも持っているという立場である[28]から，第一阿僧祇劫でも菩薩は佛相をもっているといえる．しかし，『大毘婆沙論』は三十二相の業因は百福によって一相を荘厳するという考えであり[29]，まず五十思を生じて身体を調え，つぎの五十思で円満にするという．このような説は『大毘婆沙論』とだけ一致するから，『大智度論』の「阿毘曇毘婆沙」の説は『大毘婆沙論』のこととなる．

小結

現存『大智度論』が龍樹著作なのか，どの部分が羅什付加かは不明だが，『大智度論』の指摘する迦旃延尼子弟子輩が有部毘婆沙師の『婆沙論』を奉ずる有部論師であることが確認でき，すでに六足・『發智論』が完成していたが，『施設論』は「世間施設」だけであって，漢訳された「因施設」は含まれていなかったことがわかる．『大毘婆沙論』だけに現れる『法華經』の小善成佛批判や大天が三蔵に新規の経典を挿入したことに関して，『大智度論』は全く知らず，声聞乗から菩薩乗への転根思想も十四巻『鞞婆沙論』では述べず，六十巻『婆沙論』では問

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

題としていても，縁覚から菩薩への移動を認めておらず，有部内部でも異論があったことを示し，現在の『大毘婆沙論』では，その当時活躍していた大乗佛教，とくに『法華經』教団へ対抗するために，声聞成佛論を展開したものであることがわかる．また，三十二相を具するのが，いつからかという議論では『大毘婆沙論』だけにしか見られない説明がある．羅什の付加説明とも考えられなくはないが，『大智度論』を龍樹の著作とみれば，龍樹は『大毘婆沙論』の有部説を批判していたと言える．

---

1)『大唐西域記』(T51, 889b)(以下の『大正蔵』は Cbeta を使用)　2)『歴代三寶記』(T49, 79a)　3) CE (Common Era) を採用　4) 河村孝照『阿毘達磨論書の資料的研究』p.80f.　5) 加藤純章「羅什と『大智度論』」(「印度哲学仏教学」第 11 号．平成 8 年)　6)『大智度論』(T25, 61a)　7)『大智度論』(T25, 70a)　8) 說一切有道人輩(『大智度論』T25, 61a) そのほか．『發智論』六足論などの名前(T25, 70a) や「迦旃延尼子弟子輩」(T25, 92a)「阿毘曇鞞婆沙」(T25, 92a) なども出てくる．　9)『大智度論』(T25, 61a)　10)『大毘婆沙論』(T27, 44a)　11) 十四巻『婆沙論』(T28, 467c)，六十巻『毘婆沙論』(T28, 62c)　12)『大智度論』(T25, 70a)　13) チベット語訳で「世間施設」(「加藤清遺稿　蔵文和譯『世間施設』」同朋大学論叢第 34 ～ 40 号) では．三千大千世界の様相．阿修羅と戦闘．忉利天．大劫と三災．王の出現と系譜．須弥山と四天王．地獄．世間の生成が論じられており．『樓炭經』の欝單品．轉輪王品．龍鳥品・高善士品が説かれていないことになる．また．福田琢教授も「世間施設」が最初に成立したという見解を有しておられる．福田琢「『施設論』『品類足論』の原題について」(『仏教とジャイナ教』p.173)　14)『木村泰賢全集』第 4 巻　15)『品類足論』(T26, 696b)　16)『大智度論』(T25, 86c)　17)『大毘婆沙論』(T27, 886c)　18)『大毘婆沙論』(T27, 887a)　19)『毘婆沙論』(T28, 23b, 81bc)　20)『大毘婆沙論』(T27, 889c)　21)『大毘婆沙論』(T27, 886b)　22)『大智度論』(T25, 341bc)　23)『大智度論』(T25, 271b, 341bc)　24)『生經』(T3, 99b),『撰集百縁經』(T3, 234c, 235ab, 236abc)　25) 六十巻『毘婆沙論』(T28, 19b, 23b, 267c)　26) 六十巻『毘婆沙論』(T28, 23b)．声聞・縁覚が転根して菩薩乗へと移り成佛できるという考え方は大乗佛教によって刺激を受けた『大毘婆沙論』に顕れる．　27)『大智度論』(T25, 92a, 579c)　28)『大毘婆沙論』(T27, 894c)　29)『大毘婆沙論』(T27, 889c)

〈キーワード〉『婆沙論』，『大智度論』，龍樹，羅什，有部

(立正大学教授，文博)

NII-Electronic Library Service